

視覚的カリキュラム表を作成・実施している教師の意識に関する事例的研究

－総合的な学習の時間と教科等との関連に着目して－

小林 祥奈*・松井 千鶴子**
(平成29年9月6日受付；平成29年11月16日受理)

要 旨

本研究では、総合的な学習の時間と各教科等との関連に着目し、上越市の小中学校で作成されている視覚的カリキュラム表の総合的な学習の時間と各教科等との関連についての現状把握と、実際に視覚的カリキュラム表を作成・実施している教員へのインタビューを通して、総合的な学習の時間と各教科等との関連に関する意識を調査し、総合的な学習の時間と各教科等との関連への教師の意識を明らかにすることを目的とする。分析の結果、総合的な学習の時間と各教科等との関連を図る上でもつ教師の意識として、9個のカテゴリーが生成され、そのうち【充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント】と【子どもの興味・関心に合わせて学びをつくる】の2点をコア・カテゴリーとして見出した。また、総合的な学習の時間と教科等との関連の視点から見る視覚的カリキュラム表の課題として、「実際の授業の中での関連のイメージをもつこと」「子どもたちの学びが深まる関連にするための視点の必要性」「新たなカリキュラムをつくって行こうとする意識」の3点が挙げられた。

KEY WORDS

総合的な学習の時間 教科関連 視覚的カリキュラム表 カリキュラム・マネジメント 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

I 問題の所在

平成28年8月に「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」¹⁾(以下、審議のまとめ)が文部科学省から出された。次期学習指導要領の目指す方向を「教科等を学ぶ本質的な意義を大切にしつつ、それぞれの教科等の学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科等間の相互の関連を図ることによって、子供たちが生きて働く知識を習得し、学びを人生や社会に生かそうとしながら、未知の状況にも対応することを可能とする教育課程」とし、各教科等の関連を図っていくことの必要性が述べられている。各教科等の関連は、カリキュラム・マネジメントを通じて行っていくことが求められており、カリキュラム・マネジメントの3つの側面の1つ目に「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」と示されている。また、特別活動や総合的な学習の時間(以下、総合)において「各学校の教育課程の特色に応じた学習内容等を検討していく必要があることから「カリキュラム・マネジメント」を通じて、子供たちにどのような資質・能力を育むかを明確にし、それを育む上で効果的な教育内容や活動を組み立て、各教科等における学びと関連付けていくことが不可欠である」と述べられており、総合の果たす役割が大きくなってきているといえる。

また、北(2001)²⁾は、「総合的な学習の時間と教科学習との双方向の関連の中で、学習効果が相乗効果を発揮し、子どもたちは学びや育ちの質をさらに高めていく」と述べており、総合と各教科等との関連の有効性について述べている。

一方、「審議のまとめ」に示されているように「総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにするという点については学校により差がある」という課題もある。実際、各学校で総合と各教科等の関連をどのように考えているのか、担任一人一人がどのような意識をもって関連を図ろうとしているのかなど明確でないことも多い。

新潟県上越市では、上越カリキュラム開発研究として、各学校の学校課題を明らかにして、育てたい資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントを行っている。カリキュラム・マネジメントを行う際のツールとしての視覚的カリキュラム表を上越市内全小中学校が作成し、取組を進めている。

また、上越地域は、生活科や総合が実施される以前から体験を重視した活動を行っていた風土がある土地である。

*新潟県佐渡市立真野小学校 **学校教育学系

「子ども達にさせたい活動や付けたい力のための活動を組むときには、教科の枠を超えて取り組む³⁾という考えがある。この考えは、現在の総合と各教科等との関連に繋がっているものであると考える。

そこで、本研究では、新潟県上越市の各学校が作成している視覚的カリキュラム表の分析から各学校の総合と各教科等との関連がどのように計画されているのか、また、教員にインタビューを行い、総合と各教科等との関連にどのような意識をもっているのかを明らかにし、カリキュラム・マネジメントのツールである視覚的カリキュラム表の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

II 視覚的カリキュラム表の実際

1 視覚的カリキュラム表の概要

視覚的カリキュラム表は、1年間の各教科等の学び(単元など)を一覧にして示したものであり、毎年5月に教育委員会への提出が義務付けられている。各学校課題に基づいて重点的に行いたいものについては、ボタンを設定し、重点とした単元を色つきの枠で囲むことができる。また、単元の入れ替えや関連を図りたい単元を矢印で結ぶことなどもデータの中で行うことができる。教科の並びは各学校や学年に任せられており、大事にしたい教科・領域を中心に据えて教育活動を考えていくことが可能である。

寺西(2000)⁴⁾は、伝統的なカリキュラムづくりとして次の3つのレベルに分けている。

- ①国や各地方教育委員会レベル(中央での教育課程編成, 学習指導要領作成)
- ②各教科の「教科書」編集・出版・採択(各学校での教科書の使用)
- ③各教師のレベル(主として教科単元でのカリキュラム編成)

この3つのカリキュラムづくりのレベルの視点で見えていくと、視覚的カリキュラム表は、教科書の単元や内容を踏まえて関連についての計画を立てているが、実際に「どの場面で」など細かな部分までは示されていないため、②各教科の「教科書」編集・出版・採択レベルと③各教師のレベルの中間に位置すると考えられる。

2 視覚的カリキュラム表の分析

平成27年度(49校)⁵⁾と平成28年度(52校)⁶⁾の上越市内の小学校3年生～6年生の視覚的カリキュラム表の分析を行った。

2.1 総合と教科等との関連

村川(2008)⁸⁾は、総合と教科等との関連のレベルとして①指導計画レベル、②手立てレベル、③子どもの認識レベルの3つに整理している。視覚的カリキュラム表の中での関連のレベルとしては①指導計画レベルであり、②手立てレベル、③子どもの認識レベルまでは表れていないと考えられる。

視覚的カリキュラム表での関連の表記は、ボタンとして位置づけているものと矢印や線を引いて関連させている学校がある。今回は、関連の表記が見られた平成27年度17校、平成28年度27校の学校についてどのような教科や単元での関連がなされているのかについて分析した(図1～4)

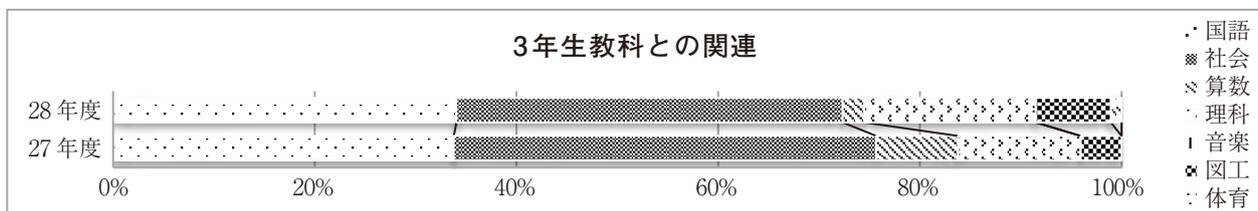


図1 各教科等との関連 3年生

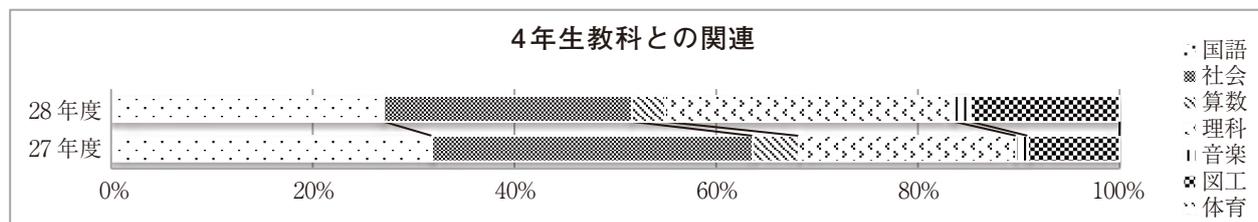


図2 各教科等との関連 4年生

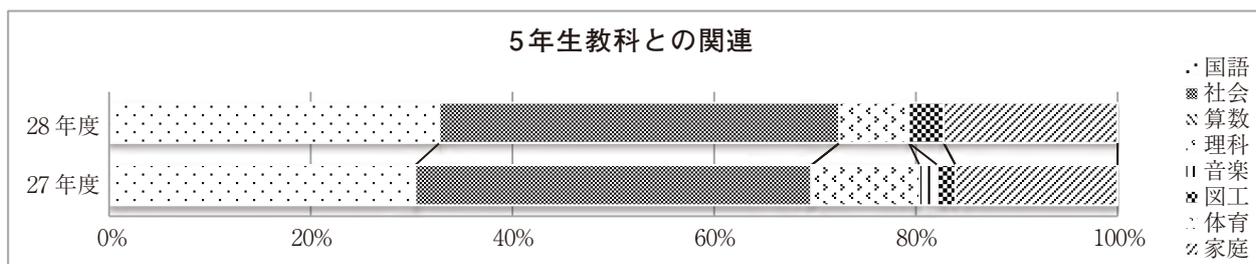


図3 各教科等との関連 5年生

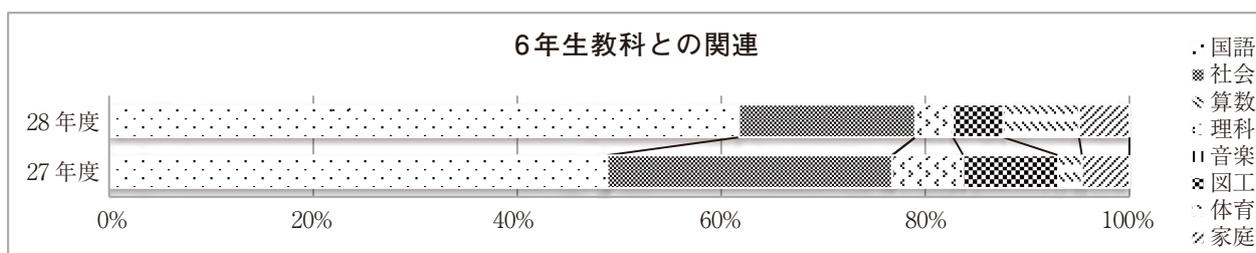


図4 各教科等との関連 6年生

各学年によって関連させている教科にばらつきがあるが、学年内での教科の関連については年度が替わっても、同じような教科・単元との関連がなされていることが分かる。

また、全学年を通して、国語や社会との関連が多く図られている。国語では、「紹介する」「調べたことを報告する」「新聞やパンフレットを作る」のような単元との関連が多くみられた。また、総合の話し合いも国語の話し合いを行う単元との関連がみられた。さらに、社会では、「町探検」「歴史」など地域のことを学ぶ内容との関連がみられる。その他にも、それぞれの学年の総合の傾向に合わせた教科との関連もみられた。

Ⅲ 視覚的カリキュラム表を使う教師の関連への意識

Ⅱでは、視覚的カリキュラム表上での総合と各教科等との関連について分析してきた。Ⅲでは、実際に視覚的カリキュラム表を作成して授業を行っている教師へのインタビューを通して、視覚的カリキュラム表についての考えや各教科等と関連させることへの思いを聞き取り、関連させる際の意識について分析していく。

1 インタビュー調査の研究の方法

1.1 調査対象

上越市立E小学校F教諭，上越市立G小学校H教諭，I教諭の3名を対象とする。

上越市立E小学校は、文部科学大臣の指定を受けている研究開発学校であり、生活・総合を中核としたカリキュラムの編成を行っている。また、上越市立G小学校は、校区の偉人に関する内容を学ぶ学習を主に総合の中で行っており、地域の資源を生かした特色ある教育活動を行っている学校である。どちらの学校も総合を中核にしてカリキュラムを作成していることから、総合と各教科等との関連を図る際の教師の意識を探ることができると考えた。また、当時F教諭は中学年，H教諭は高学年の担任をしており、総合と各教科等との関連を図りながら授業を行っていた。I教諭は、当時低学年の担任をしており、生活科の中で教科等との関連を図っていた。本研究は、総合と各教科等との関連に焦点を当てているが、教師のもつ各教科等との関連の意識を探るためにI教諭も対象として考えることとする。

1.2 調査期間

平成28年1月～平成28年5月

1.3 調査方法

3名の教師それぞれに60分程度の時間を設定し、インタビューを行う。それぞれの教師が作成した視覚的カリキュ

ラム表を見ながら、総合（生活科）の計画やそれに関わる各教科等の関連についてのインタビューを行った。具体的な内容は「総合（生活科）の計画や進めた様子」、「関連をさせる際に意識していること」、「関連させた時の子どもの姿」などについてである。研究対象者の了承を得て、インタビューの内容は、ICレコーダーに記録した。

1.4 分析方法

本分析では、インタビューデータを基に対象者の意識モデルの構築を目的としている。そこで、木下(2003)⁹⁾の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTA）を採用する。少数事例も取り入れることができるように、西條(2014)¹⁰⁾のSCQRMの考え方も取り入れた。また、より客観的に分析することができるように、以下の④までの分析の過程の中においては戈木(2013)¹¹⁾のグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下GTA)のプロパティ、ディメンション、ラベルを示しながら分析を行うこととする。

＜分析の手順＞

- ①インタビューデータを文字化し、テキストを作成する。
- ②作成したテキストを切片に分ける。
- ③切片データから、プロパティとディメンションを抽出し、ラベル名を付ける。
- ④ラベルをカテゴリーにまとめてカテゴリー名（概念名）を付ける。
- ⑤分析ワークシートを作成し、カテゴリーを生成する。
- ⑥暫定的な全体像やモデルを素描する。

2 インタビュー調査分析結果

分析の結果、29個の概念と9個のカテゴリーが生成された（表1）。

以下では、分析結果を意識モデル（図5）、ストーリーライン、そして、調査対象者の語りを紹介していく。なお、〈〉は概念、【】はカテゴリーである。

表1 カテゴリーとカテゴリーに含まれる概念と定義

カテゴリー	概念名	定義
充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント	1 総合を中核としてマネジメントを行う	総合を視覚的カリキュラム表やカリキュラムの中核として捉えている
	2 充実した総合をつくりたい	自分の色が出る、自分にしかできない総合をつくる
	3 総合への難しさ	時数が少なく、のびのびと総合ができないことや一人で総合を考えていくことへの難しさを感じている
子どもの興味・関心に合わせて学びをつくる	1 子どもの立場に立って考える	子どもありき、子ども目線で学びを考える
	2 子どもと共につくる	子どもの興味・関心を意識しながら学びをつくる
やらなくちゃいけないことはやる	1 教科書に縛られずに学びをつくる	自分たちで学びやカリキュラムをつくらうとする
	2 教科書や指導要領を使う	関連させる際に教科書や学習指導要領の内容にも触れながら考える
	3 単元や内容の入れ替え	子どもに合わせて、学習の単元や内容を入れ替えながら子どもの学びを作っていく。
4月のカリキュラム表は完成ではない	1 カリキュラム表をつくり変えていく	カリキュラム表を見直したり、変更したりしながらつくっている
	2 カリキュラム表は学びの足跡	カリキュラム表は、学期の最後に完成する、学びの足跡であること
見通しをもつ	1 付けたい力や総合の目標をもってカリキュラムを作成する	子どもに付けたい力、育てたい力を意識しながら、総合の案をもつ
	2 見通しをもつことの難しさ	総合の計画を立てる際の見通しが苦しい
	3 年間の見通しをしっかりとつ	力を入れる時期を見通したり、活動の繋がりを考えるなど1年間を通した総合の見通しをもつ
学びを深める、基礎の発展を目指す	1 学びを深めるための関連	総合や教科の学びを深めるために関連を図る
	2 基礎は関連させない	基礎は関連させず、おさえていこうとする
	3 総合で基礎基本を深める、発展させる	関連させることによって、基礎基本を追求・発展させる
	4 学習内容と関連させる	学習内容と総合の関連を図る

関連やカリキュラム表へのよさと不安	1 計画にないものも関連させる	計画にないものでも関連付ける
	2 カリキュラム表は分かりやすい	カリキュラム表をみることで、活かせるものが明確になったり、考えていた活動のイメージができる
	3 子どもの興味・関心が根拠	活動したことの学びが根拠となるような関連へのよさ
	4 時数に縛られず詳しく学べる	関連させることによって、時数が広がり詳しく学ぶことができる
	5 子どもの学びとの繋がりへの不安	関連させるタイミングや関連させることでの子どもの学びへの悩み
子どもの意欲を高める	1 学び方	子どもの学びに合った学び方を取り入れる
	2 子どもへの思い	子どもへ持つそれぞれの担任の思い
	3 子どもの意欲を引き出す	子どもの意欲ややる気を引き出すための活動や声掛けを行う
子どもの姿を見取る	1 子どもの中での関連	実際に関連をさせる中で見えた子どもの姿
	2 総合を根拠に学ぶ子ども	総合での学びを根拠に教科の学びを行う子どもを見取る
	3 学びを生かそうとする子ども	学びを生かしている子どもの姿を見取る
	4 子どもの成長への喜び	子どもの成長を見取る

カテゴリー【充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント】は、＜総合を中核にしてマネジメントを行う＞＜充実した総合をつくりたい＞＜総合の難しさ＞から生成された。今回インタビューを行った教諭の務める学校は、総合的な学習の時間を中核に据えている。「これ（総合の活動で生まれた探究力）がだから、中核になっている意味はそこ（勉強したい根拠になる）にあるかなって感じがする」「総合の活動からどこに行くか、ここ（総合）中心なので」という語りから、学校として総合を中核に据えているからという考えだけではなく、総合の活動が子どもたちの学びへつながっている実感を持った＜総合を中核としてマネジメントを行う＞という意識になっている。また、担任の色が出る＜充実した総合をつくりたい＞と考える反面、時数の縛りや単独でやることへの＜総合の難しさ＞を感じている。＜総合の難しさ＞を感じつつ、それを補いながら自分が納得するような充実した総合をつくってくためにカリキュラム・マネジメントを行っていることがうかがえる。

カテゴリー【子どもの興味・関心に合わせて学びをつくる】は、＜子どもの立場に立って考える＞＜子どもと共に学びをつくる＞から生成された。「こっちが押し付けるわけじゃなくて、子どもありきですからね（後略）」「子ども目線で考えなきゃな」の語りからもわかるように＜子どもの立場に立って考える＞意識が見られた。教師の押しつけではなく、子どもの興味・関心から学びをつくっていきたいと考えている。子どもの立場に立つだけではなく、子どもと話し合いを重ねながら学びをつくらう、子どもの興味・関心の行き先をつくらうという＜子どもと共に学びをつくる＞意識がみられた。

カテゴリー【やらなくちゃいけないことはやる】は、＜教科書に縛られずに学びをつくる＞＜教科書や指導要領を使う＞＜単元や内容の入れ替え＞から生成された。「すごく難しいことなんですけど、教科書ありきでいくと、自分たちで学びをつくらうとかカリキュラムをつくらうとかはならないよね」という語りからもわかるように、自分たちのカリキュラムをつくっていくためには、＜教科書に縛られずに学びをつくる＞意識をもつ必要がある。一方、「（教科書にしばられないといっても）学習指導要領を逸脱しないようにしてる、よせていかないと」という語りから、縛られたくないが学習指導要領に沿って学びをつくらうとする考えがみられた。また、別の教諭からは、「教科書とか指導書とかを最初に見て、一通り頭の中に入れて、関連付けられるところはないかって探して線を引いて行く感じになります」と教科書や指導書を頼りに関連を考えている様子が伺えた。ここから＜教科書や指導要領を使う＞とした。教科書や学習指導要領で扱われている学習を取り入れながらも、＜単元や内容の入れ替え＞を行い子どもの学びに合わせた関連を行っていることがうかがえる。

カテゴリー【4月のカリキュラム表は完成ではない】は、＜カリキュラム表をつくり変えていく＞＜カリキュラム表は学びの足跡＞から生成された。「最初から完成させてこの通りにやっていくっていうカリキュラムじゃなくてどんどん変えていく」「（やっていくうちに使えると気付いて）で、勝手に自分の中だけで線を引き（関連をさせ）…」と語っているように、カリキュラム表はつくり変えていくものである、やりながら関連を増やしたり減らしたりすることができると考えていた。また、インタビューを実施している時期にも関連させる場所を入れ替えたりしている様

子もあった。このことから<カリキュラム表をつくり変えていく>とした。また、「最終的にこういう学びの足跡になったよ、って出来るのがこの視覚的カリキュラムっていう考えの方がいいかな」という語りから<カリキュラム表は学びの足跡>とした。

カテゴリー【見通しをもつ】は、<つきたい力や総合の目標を持ってカリキュラムを作成する><見通しをもつことの難しさ><年間の見通しをしっかりとつ>から生成された。「考えていくときに、この活動がうまく進むためにはおそらくこんな力が基本的にあるのかなとかそういうことを考えます」と語っているように、<活動で必要な力を考え、カリキュラム表を作成する>ことがうかがえる。また、<総合で意識する子どもに付きたい力>を意識しており、<つきたい力や総合の目標をもってカリキュラムを作成する>ことがわかる。また、「それ（どれだけ総合に見通しがもてるのか）が一番苦しいところだよ」と見通しをもつことの難しさを語っている。一方、「それ（総合の見通し）はほんとに先生の思いだったり、ビジョンがしっかりしてないととても矢印もどこにも引けないので」と思いやビジョン、そして<年間の見通しをしっかりとつ>ことを語っている。見通しをもつことへの難しさを感じてはいるものの、子どもに付きたい力や総合で目指す方向を明確にして、年間の見通しをもとうとしていることがうかがえる。

カテゴリー【学びを深める、基礎の発展を目指す】は、<学びを深めるための関連><基礎は関連させない><総合で基礎基本を深める、発展させる><学習内容と関連させる>から生成された。「関連させてないのが、そういう風な勉強（基礎）かなって思います」や「それ（基礎基本）をさらに追究したり、深めたりできるのが総合の良いところだなあって思う」と基礎は関連させないが、<総合で基礎基本を深める、発展させる>ことができると語っている。また、「総合でここ深めたいかもっと知ってほしいっていうときに。社会は社会で目標があるけれども、総合でもうまくかかわらせて総合のねらいを深めていきたい」と<学びを深めるための関連>を考えていることが分かる。<学習内容と関連させる>では、子どもたちの総合での学びと教科の学びが一致したところを関連させようとする意識がみられた。

カテゴリー【関連やカリキュラム表へのよさと不安】は、<計画にないものを関連させる><カリキュラム表は分かりやすい><関連することのよさ><時数に縛られず詳しく学べる><子どもの学びとの繋がりへの不安>から生成された。4月の段階の視覚的カリキュラム表で関連の表記をしていないものに対しても<計画にないものを関連させる>ことが「「ことば」もこういう力を付けたい、こういう学習内容を付けたいっていうことと学習内容が合致していれば、そこ（学習内容が合致したところ）を矢印はかいてないけどもこんな風にして考えていくっていう」という語りからうかがえる。カリキュラム表へのよさとしては、「忘れていたところが毎日やっていると、その日暮らしてバタバタなんだけど、こう矢印があったりすると、あ、こことかかわらせてやればいいんだとか、国語の学びをここで活かせるんだとか」と語っているように<カリキュラム表は分かりやすい>ものであり、視覚的カリキュラム表を作成していることで日々の授業での関連が意識されやすくなっている。関連のよさは「(特に関連させてよかったのは、) 詩を味わおうっていう単元も、体験して感じたことを使って自分で詩を書いてみたりとかそういうなんか、総合が根拠となって、ここで言語で表現するとかそういう風になりますね。」と<子どもの興味・関心が根拠>となっている学びへのよさを語っている。また、「社会では、時数は何時間で終わらせましょうっていうのがあるけれども、総合で関連させればもっと深めることができるので、それはよかったなって思います。」と<時数に縛られず詳しく学べる>ことへのよさを感じている。一方、不安ももっていた。「一応最後の方に合わせてレポートを書いてもいいし、うーんちょっと悩んでいるところです」「ただ、必ずしも、一般の学校の3年生が学ぶことをできるとは限らなくて、ここで水の生き物がすごく偏ってしまった時に、上手く昆虫に結び付かないとかはあるんですけど」と語っているように、不安の内容は異なるものの、関連させるタイミングや内容による<子どもの学びとの繋がりへの不安>を抱えていた。

カテゴリー【子どもの意欲を高める】は、<学び方><子どもへの思い><子どもの意欲を引き出す>から生成された。「そうだね、本だけじゃわかんないじゃん」「聞いた方がまた、記憶にも残るので、そういうのもあるけどね。」と子どもの学びに合った<学び方>を取り入れている。また、「同じつくるでも、私の思いと子どもの思いは違って、やっぱり子ども優先でしながらやっていったよね。」と子どもの思いを大切にしようとする思いや「(関連させると) みんなきっちりで、1枚でいいやっていうのが8人分量産されるので」と子どもの個性も大事にしたいという思いである<子どもへの思い>が伺えた。「なのでなおさらやる気に火がつく」と<子どもの意欲を引き出す

＞ような声掛けや活動を仕組んでいた。

カテゴリー【子どもの姿を見取る】は、＜子どもの中での関連＞＜総合を根拠に学ぶ＞＜学びを生かそうとする＞＜子どもの成長への喜び＞から生成された。「子どもの興味・関心が向いていないところで関連付けてもびっくりするほどスルーですよ」という関連と結び付かなかったことや「みんななんかこう、本物じゃなくてこう、筆箱ばかり見てみたい。いくつ分とか」と子どもの姿として関連させている様子は見られるものの、本来の目的とはずれた関連となってしまったことなど＜子どもの中での関連＞について語っていた。また、「（「ことば」をやっているときの子どもたちの）意識は、たぶん「生活・総合」をやってるんじゃないかな」と＜総合を根拠に学ぶ＞子どもの意識についても語っていた。見取った子どもの姿としては、「やっぱり、ここでの知識をいろんなところで生かそうとするんですよ」「子どもが勝手に関連付けていくんですよ」と語るように＜学びを生かそうとする＞子どもの姿を見取っている。子どもたちを見取る中で、「やっぱり気付いてやってたし。よっしゃーって」と＜子どもの成長への喜び＞を感じていることもうかがえた。

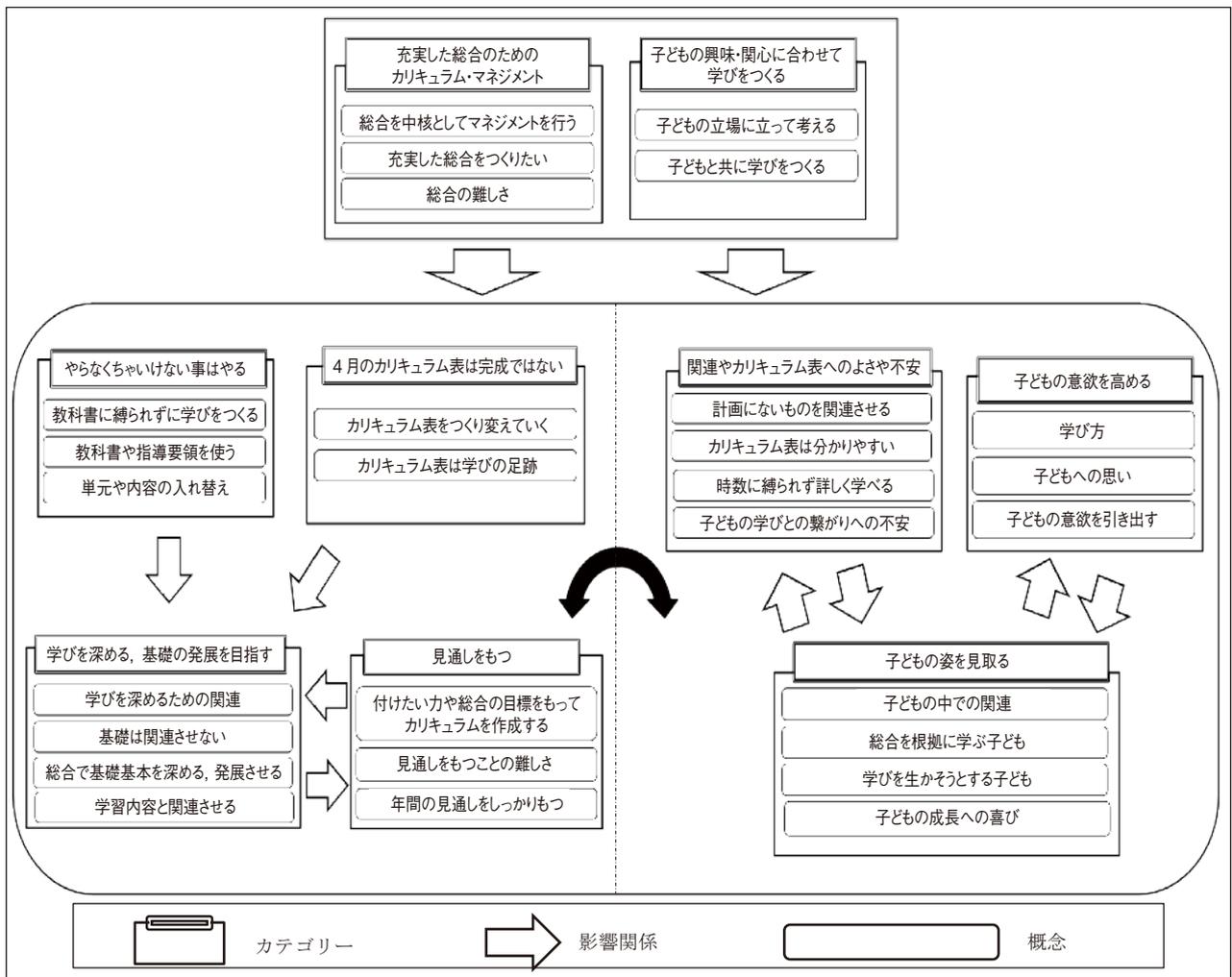


図5 教科等の関連への意識に関する意識モデル

教師の語りから、教師の教科等の関連の意識のコア・カテゴリーを【充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント】と【子どもの興味・関心に合わせて学びをつくる】とした。また、それぞれのコア・カテゴリーとの影響関係にあるカテゴリー7つがある。

＜ストーリーライン＞

コア・カテゴリーとして【充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント】と【子どもの興味・関心に合わせて学びをつくる】の2つが見出された。

1つ目のコア・カテゴリーである【充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント】からは、＜総合の難しさ＞を感じながらも＜充実した総合をつくりたい＞という思いをもって、＜総合を中核としてマネジメントを行う＞意識がみられた。【充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント】を行うにあたって、視覚的カリキュラム表の作成や総合の計画を立てていかなければならない。＜見通しをもつことの難しさ＞を感じながらも＜つけたい力や総合の目標をもってカリキュラムを作成する＞、＜年間の見通しをしっかりとつ＞のように【見通しをもつ】ことを大切にしていることがわかる。また、＜総合の難しさ＞を補うために、教科等との関連を図るが、教科書や学習指導要領に示されている内容のような【やらなくちゃいけないことはやる】という意識や＜基礎は関連させない＞で【学びを深める、基礎の発展を目指す】という意識をもちながら関連を図っていることがわかる。

もう1つのコア・カテゴリーである【子どもの興味・関心に合わせて学びをつくる】では、＜子どもの立場に立って考える＞、＜子どもと共に学びをつくる＞意識がみられた。子どもの気持ちを考えながら学びをつくるためにも、【子どもの姿を見取る】ことは欠かせない。＜子どもの中での関連＞や＜総合を根拠に学ぶ＞姿、＜学びを生かそうとする＞姿を見取ることで、＜子どもの成長への喜び＞を感じている。また、子どもを見取ることで、【子どもの意欲を高める】手立てを打ったり、【関連やカリキュラム表へのよさや不安】として＜子どもの学びとの繋がりへの不安＞を感じていた。一方、よさとしては、＜時数に縛られずに詳しく学べる＞ことや＜子どもの興味・関心が根拠になっている＞ことをあげている。

2.2 インタビュー調査の考察

教科等の関連を行う際の教師の意識の中核には、【充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント】を行う意識と【子どもの興味・関心に合わせて学びをつくる】意識がみられた。

語りの中からも見られるように「総合的な学習を充実させたい」という意識の裏には「自分の色の総合をつくりたい」「昨年度の真似ではだめだ」という意識が働いている。自分が納得することができるような総合を目指して、カリキュラム・マネジメントを行おうとしていると考えられる。その1つの方法として教科等との関連を図っているのだろう。学習指導要領に定められている内容は確実におさえつつも、学びを深めるための関連や基礎を発展させる関連を行っていた。教科の時数が限られていることや以前に比べて総合の時数が減っている事からもこのような意識が強まっているのだと考える。教科の内容も深めつつ、総合の内容も充実させていくような活動となるように見通しをしっかりともちつつも柔軟に視覚的カリキュラム表をつくり変えていくことにより、その実現を目指していると考えられる。

また、「総合を充実させたい」という教師の思いだけで進めるのではなく、子どもの立場に立ち、子どもと相談しながら学びをつくっていく様子もうかがえた。日々、子どもの姿を見取りながら、子ども達が意欲的に学びに向かうことができるようにと手立てを打っていることがわかる。このことから、教師が引いたレールの上を子どもたちがただ進むのではなく、子どもの興味・関心を拾いながら、学びを生成していきたいという意識があると考えられる。

2つのコア・カテゴリーは、総合への思いや計画段階での教師の意識としての【充実した総合のためのカリキュラム・マネジメント】と、その計画を実際に行う際の意識としての【子どもの興味・関心に合わせて学びをつくる】意識とすることができる。そのため、コア・カテゴリーと影響関係のある7つのカテゴリーは、その場面に応じてコア・カテゴリーから影響を受ける度合いを変えながらも、常に教師の中で意識され続けているものであると考えられる。

本研究で見出したコア・カテゴリーである2つの意識は、総合と教科等との関連を図る際に欠かすことのできない教師に求められる意識であると考えられる。総合での学びを深める、充実させることに限らず、教科の学びを深めるためにもこの意識は欠かすことのできないだろう。教師が子どもの興味・関心の方向を見取りながら、カリキュラム・マネジメントを行っていくことによって、より充実した学びにつながると考える。

IV 全体考察

視覚的カリキュラム表の分析と実際に視覚的カリキュラム表を作成し授業を行っている教師へのインタビューの分析から得た現状を踏まえて、視覚的カリキュラム表や総合と各教科等との関連にかかわる課題について考察していく。

①関連への具体的なイメージ

問題の所在でも述べたように、「審議のまとめ」の中で「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標

を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」と記されている。視覚的カリキュラム表は、各学校の学校課題を踏まえてカリキュラム・マネジメントしていくためのツールであり、教科横断的な視点を取り入れながら教育内容を組織的に配列していくことのできるツールでもある。このことから、これからさらに視覚的カリキュラム表を活用した取組が重視されるだろう。

一方、現在の視覚的カリキュラム表の表記の仕方では、「各教科等の教育内容を相互の関連で捉え」という点が弱いと考える。現在の表記では、具体的な関連の姿が見えづらい。総合の小単元や活動と各教科等との単元という大きな範囲の中での関連を示しているため、実際どの部分で関連がなされるのかが明確ではなく、また、作成する際にどの部分でどのように授業を行うのかまではあまり意識されていないこともインタビューでの語りから推測できる。4月の時点で曖昧なものが、1学期末、2学期末と見直しを重ねていく中で具体的になっていくという学校もあるだろう。「視覚的カリキュラム表は学びの足跡」と捉えている教師もいるように、視覚的カリキュラム表は、子どもの学びの足跡となってより具体的なものへと変わっていくものと捉えることもできる。しかし、4月、5月の段階での計画づくりが重要であることは当然であろう。計画表の段階で具体的な各教科等の教育内容の関連のイメージをもちながら関連を考えることが、充実した学びへと繋がっていくと考える。

②学びの深まりを意識した視点の設定

具体的な関連のイメージや意図をもって関連を考えることができれば、「話し合いをしたから国語」「絵を描いたから図工」といったような、時数だけを他教科等からもらってくるような単純な関連にはならないのではないだろうか。総合の時数が少ないからと教科から時数をもらってくる形の関連も中にはあると思うが、「関連させる」ということの意味も捉えなおしていく必要があるだろう。「基礎を発展させる関連」、「学び方を活用する関連」のように子どもたちの学びが深まる関連にするためにも、教育委員会や各学校単位で関連させる視点のようなものを明確にして作成していくことも求められるかもしれない。

③新たなカリキュラムをつくらうとする意識

総合の内容の分析から、固定化が見られるが分かった。「時数の厳しさ」を感じながら教科や総合の授業を行っていることがインタビューからもうかがえた。「もっと深めたい」「詳しく知りたい」という子どもの興味・関心を生かすことを考えると、必然的に教科書の内容に近いものを総合のテーマとして扱っていくことになるのではないかと考える。教科の内容に含まれているものを総合のテーマとすれば、実物に触れたり、より深く考えたりしながら教科と総合の学びをすることができる。そのように「子どもと共に学びをつくる」ことを行おうとした結果が、現在の上越市内の小学校の総合の傾向に現れてきているのではないかと考えられる。しかし、インタビューの中にも見られた「教科書ありきでいくと自分たちで学びをつくらうとかカリキュラムをつくらうとかならないよね」という言葉のように、教科書の内容を意識することが、総合での活動において教科等との関連を図りたいという意識になり、それがカリキュラムの固定化につながっているのではないかと考える。

V 今後の課題

本研究では、上越カリキュラムをマネジメントしていくためのツールである視覚的カリキュラム表の現状の分析と実際に視覚的カリキュラム表を作成し、授業を行っている教師へのインタビューを通して、上越市の視覚的カリキュラム表の現状と各教科等との関連にかかわる教師の意識を明らかにすることができた。

課題として2点挙げる。1点目は、視覚的カリキュラム表に加えて、各学校の総合の年間指導計画をみていくことでより具体的な関連まで迫ることができたのではないかとということである。2点目は、教師が実際の授業でどのように関連をさせているのかということも分析していくことで、総合と各教科等との関連の実際や教師の意識をより明確にすることができるかと考える。

引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省：「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ
- 2) 北 俊夫：『「総合的な学習」と教科等との相互関連』、明治図書、2001年、p.17
- 3) 上越市教育委員会指導主事 石黒和仁 講話（2016年4月）
- 4) 寺西 和子：『総合的な学習の理論とカリキュラム作り』、明治図書、2000年、p.55
- 5) H27年度上越市小学校視覚的カリキュラム表

- 6) H28年度上越市小学校視覚的カリキュラム表
- 7) 文部科学省：『小学校学習指導要領』，2008年，p.110
- 8) 村川 雅弘：『教科と総合の関連で真の学力を育む』，ぎょうせい，2008年，pp.24-26
- 9) 木下 康二：『ライブ講義M-GTA -実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』，弘文堂，2007年
- 10) 西條 剛央：『ライブ講義・質的研究とは何かSCQRM ベーシック編-研究の着想からデータ収集，分析，モデル構築まで-』，新曜社，2007年
- 11) 戈木クレイグヒル滋子：『質的研究法ゼミナール グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ』，医学書院，2013年

A Case Study on the Consciousness of Teacher Creating and Implementing a Visual Curriculum Table

– Focusing on the relation between the time of comprehensive learning and each subject –

Sachina KOBAYASHI* · Chizuko MATSUI**

ABSTRACT

In this research, focusing on the relation between comprehensive learning time and each subject, we describe the current situation regarding the time of comprehensive learning of the visual curriculum table created by Joetsu City and the relation of each subject, etc. Through an interview with teachers who actually created and conducted a visual curriculum table, we investigated the consciousness concerning the comprehensive learning time and the relation between each subject, etc. This research aims to clarify the teacher's consciousness to the relation. As a result of the analysis, 9 categories were generated as a teacher's awareness in relation to the time of comprehensive learning and each subject, among them [curriculum management for comprehensive comprehension] and [child learning according to the interests of interest] as core categories. In addition, as a task of the visual curriculum table from the viewpoint of the relation between comprehensive learning time and subjects, "to have images of relationships in actual classes", "to relate the children's learning needs" and "to consciously try to make new a curriculum".

* Mano Elementary School ** School Education